

大雅の三岳紀行

菅 沼 貞 三

兼葭堂襍録に載るところの大雅堂年譜に據れば、寶曆十年、大雅三十八歳の六月廿七日よりして白山、立山、戸隠山、淺間山に上り、荒舟山及び富士八級に至る。芙蓉と大年が同行したとある。このこと近世逸人畫史、槃礴脛話、近世畫史、雲烟所見略傳及び近世名家書畫談などにも記載されており、殊に近世名家書畫談中に編者安西於菟は次の如く記してゐる。「時に其人敗爛せる一小簿を出し於菟に示して云、これは昔時池大雅、高芙蓉、韓大年の三老人同遊して三岳へ登りし時、大年腰間に帶たる小遣帳なり、余受けて見るに表に三岳記行と題し背に韓の一字を題す、内には起程の日よりして日雜費並に途中の光景を記し、又見る所の山川の眞景艸々走筆其間にあり、今よりしてこれを見れば一見の間三老遊境想像するにたへたり」と。嘗て昭和八年の秋、恩賜京都博物館に於て池大雅遺墨展覽會が開かれた時、偶々その出陳の遺品中に、兵庫の津田信吾氏所藏にかゝる大雅、芙蓉、大年の三岳紀行八曲屏風一隻あるを見出し、是れこそ前記の記事に符合する遺品として、當時一部の史家の感興を

そゝること尠からず、わが美術研究所に於ても直に之が影本を作成して置いた。今茲にその全文を掲げて、大雅研究の上に一資料を供せんとするに當り、現存の形狀を略記し聊か所見の概要を附記して置かう。

本屏風は各扇豎九〇・五糎、横四二糎の八曲小屏風で、右紀行中の山川のスケッチや途上見聞の狀況行程、または日々の雜費などを記したものを、各扇に五紙乃至七紙を貼込にしてゐる。その中畫圖は十七紙、畫と文と交るもの五紙、途上の狀況を記したもの八紙、日々の雜費を記載したもの十二紙、其外に冊子の表背二紙及び古筆了仲の極書一紙と鷗齋の跋文一紙都合四十六紙が貼附されてある。一紙の標準法量は凡そ豎一二糎、横三四糎あり、これと略同寸法のもの三十七紙の大部を占め、中に横半截の豎一二糎横一七糎のもの四紙、これと同寸法にて豎繪のもの一紙、外に冊子の表背各豎一七・二糎、横二三・五糎あり、紙の折目などから推して、もとは是等は表背紙と同大の半紙四つ折の小冊子であり、後に現存の如き屏風貼込

に改装したものと思はれる。

さて本紀行の畫者及び筆者は誰と認定すべきか。古筆了仲の極書に據れば畫者は大雅堂、表背の文字は韓天壽、本文の筆記は高芙蓉と推定してゐる。また前記近世家書畫談に據れば、道中日記は大年翁の筆になり、面に三岳記行と題し、背に韓の一字を題す、帳中の眞景圖及び圖中の和歌は皆大雅堂の自筆になるものと明記してゐる。吾等一觀するに畫圖はすべて途上匆々の間、走筆を馳せて目睹の山川を縮寫せるに過ぎぬもので、輕妙の筆致なかく捨て難いが、本格的に構成された畫圖ではない。従つてその筆格の特徴を識別することは容易になし難いのであるが、圖中に立山圖及び葦嶽と書してある文字は正しく大雅風にて、畫圖また筆鋒の自由に伸張せる點など凡手のよくするところでない。立山圖に見る如く細線で輪廓づけた筆致は、小淺間、妙義と留書する圖にも、淺間より遠望せる諸圖にも見られ、また葦嶽の圖に見る如き抑揚ある筆致は溪谷を圖せるものにも、越後妙高山と記してある圖にも見られ得る。他圖も大方この何れかに類する筆法にて成り、是等は凡そ同一の畫者が考究される。然るに畫と文と交れるもの、中で、比丘尼石堂と記してあるもの及び鼠宿と留書せるものなどは全くの略圖で、筆も上記の諸圖と異なり稍々佶屈に陥つてゐる。恐らく同文の筆者と同一のものかと推せられる。猶本文の筆者に就て、日々の雜費記入はすべて同筆に成るも、途上見聞の狀況や道中の里程などを記したものの、中には異筆が混じてゐる。今その各々を誰某の筆と認知するは困難

とするも、畫圖は大方大雅なるべく、本文記入は大年と想定され、その間異筆と目せられるもの、中に、大雅や芙蓉の筆が混じてゐると思はれる。然し本紀行の妙趣はかゝる筆者の穿鑿にあると云ふよりも、寧ろ旅すきの大雅が同好の友と連立つて、古來海内の三靈山の稱ある富士、白山、立山に登つた時の合作になる記念の冊子とみて、所謂三岳道者の道中をしるこの上もない資料としての點に存してゐる。

翻つて本屏風に就いてみるに、向つて右より第一扇第一紙に「富山出はなれ云々」と起書せる行程があり、次に立山登山口の芦嶽附近の畫圖がある。以下畫圖と途上見聞記と次々に第二より第五に至る各扇と第六扇の上部まで續いて居り、第六扇第二紙より第八扇第二紙にかけて、道中日々の雜費が目を追うて記入されてゐる。右はもとの冊子と同一順序に成れるものか判然としないが、途上の見聞記と、畫圖とを合せ一括し、日々の雜費記入のものを一括して別にしてみれば、大體屏風貼込の順序にて、旅の行程が辿れるので、後掲の本文の排列は現存の貼込順に従つた。但し第六扇中の一部が紙の長短による爲か、前後してゐると認められるので、月日の順に變更して置いた。尙本文を活字に移すに當つて、原文中あて字はそのまゝにし誤字と認められるものはマ、を附し、また假に判讀せる文字はカを附し置き、不明は□を以て示す外、行數、字詰等は原文通にして置いた。而して文中に朱をもつて、例へば池、おどり、見物の如く、傍點を附してあるものは或は後人の作意になるかと思はれもす

るが、墨點を附してその儘にし、また一紙毎に——を入れて置いた。次にその内容を閲するに、既記の如く道中の行程記入のものは「富山出はなれ」より始められ、甲州の河口や上州の草津云々の記載に終り、日々の雜費記入のものは、六月廿七日近江の天津追分とあるに始まり、八月三日信州の岩村田及び一ノカ谷に至るところで終つてゐる。或はもとの冊子に於ては日々の雜費記入より始められ、道中行程や畫圖は適所に介在し記入されたものかと考へられもするが、雜費記入の終と行程記入の終の地名に懸隔がある。或は道中の行程記入のものは前文が、雜費記入のものは後文がいつしか失はれたのかも測りがたい。

近時刊行の大雅文獻中美術叢書相見香雨著池大雅及び小年讀本卷一六田山花袋著池大雅に、韓天壽の旅行日記なるものを引用して「八月の中旬といふに一行は無恙東武に著し不取敢築地八町堀の篠屋といふにやどりぬ。(中)四日程やどりて直に富士山へ向けて出發せり。(中)廿三日といふに富士山へののぼりぬ。こたびは西の口より登りぬ」などとある。今日その原本が何處に存するか不明に付、検討のよしもないが、或は本紀行の後文を補するものであるかも知れない。また三村清三郎氏の「醉晋齋韓天壽」三重縣史談會誌一ノ四、五參照に據れば、中井敬所翁の談として江戸の書家中川憲齋が天壽、芙蓉、大雅、三翁の三岳めぐりの旅日記を藏して居つた由と記してゐる。右は本紀行と同一のものか、または異本か不明なるも、前記近世名家書畫談中、本紀行の冊子に關し「これは大年翁の帶たるものなり、外に二冊ありて其一は大雅翁其一は芙蓉翁の帶ら

れしもありときく」とあるからに、或はその一本なるかも測り難い。尙前記鷗齋の跋文本屏風第二 扇第七紙に「此小冊子は大雅大年芙蓉三翁紀行之雜記也、永根五石與之三好汝圭、汝圭與之余、余亦呈之椿齋雅兄に、時慶應三年秋炎如蒸、小艇浮墨水納涼中所約也、鷗齋」とあり、また本紀行の表紙本屏風第八 扇第三紙には「永根氏家藏印」朱文長、方形、「盤薄居」朱文、方形及び「太復圖書」朱文、方形等の所藏印が捺せられてある。また本屏風の箱書に「海舟先生より贈らる 富田氏」とある如く勝海舟より富田鐵之助氏の藏有となり、後現所藏者津田氏の有に歸したものである。以上により本紀行の幕末以降の所藏經過が窺はれると共に、もとの冊子が屏風貼込に改装された時期も略想定されるが、本紀行の一部が散失せるものかどうか、または大雅や芙蓉の帶用せると云ふ別本が何處かに存するかどうか、大方の示教に俟ちたいと思ふ。

依つて茲では専ら本紀行の記するところに従つて、一行の旅程の跡を辿つてみれば大略左の如くである。但し文中記入の昔時の名稱や假名及あて字の地名は便宜上、現時慣用の地名に改めて置いた。本文の註記も同斷。

まづ六月廿七日大津泊とある。年紀を缺くも既記の如く寶曆十年の當日に京都を發足し來つたものであらう。桃西河の隨筆坐臥記に「三人の者俄に攀登の心起れり」本誌五〇號所載森統三氏「大雅遺聞」參照とあるやうに、雲烟にあくがる、三翁が急に思ひ立つまゝに旅に出たことは、この日及び翌廿八日に互り大津で種々旅装を整へる出費の記入あるを見ても推せられる。同廿八日には湖上を舟行して途中で一泊し、同廿九日に西近江路の今津から再び湖上を渡り、百瀬、知内の川尻で舟

をすて、海津より七里半越を踰へて同夜は越前の敦賀で半泊。七月朔日の未明夜舟で敦賀灣を河野津に渡り、それより敦賀道を北陸道の武生に出て、麻生津泊、同二日は福井の城下を過ぎて勝山街道を行きて六日市泊、同三日は愈々白山の攀登にかゝり途中で泊り、同四日白山室堂泊。同五日は下山して尾添川の流域を下つて加賀の尾添泊、同六日同じ流域に沿うて木滑を経て鶴木泊、同七日は金澤城下に宿る。同八日は北に進んで途中埴生八幡宮に詣で石動泊、同九日は石動より高岡に至る四里の間を川舟で下り、それより富山に出て泊る。同十日は本文の巻首にある如く、富山を出はなれて立山の山道にかゝり、常願寺川の流域の芦峠泊。同十一日には途中桑谷の接待をうけて、立山の室堂に著く。翌十二日山が荒れ大風雨となり室堂に滞留、同十三日に立山の社に詣で同夜も亦室堂泊、同十四日に下山し、常願寺、稱名兩川の流域を芦峠に出て宿る。同十五日には芦峠を立つて上市に出で、それより北陸道を魚津に行つて泊る。同十六日に黒部の峡谷をさぐりて同夜は越中下新川郡浦山村泊、同十七日浦山より愛本を経て、北陸海岸の市振に出て宿る。こゝで或は天候の爲か同十九日迄三日間逗留し同二十日に至りようやく親不知の險を過ぎて、青海を經、姫川を渡つて糸魚川泊。同廿一日北陸道の能生、直江津を經て、そこより北國街道を越後の高田に出て宿る。同廿二日は北國街道を南にとつて信越の國境關川に休み、野尻湖畔を過ぎて信州の柏原泊。同廿三日戸隠山に登り同夜は善光寺泊、同廿四日は善光寺參詣の後、犀川を渡舟しまた千曲川を渡つて屋代

に出で、同夜は鼠宿にて泊る。同廿五日は北國街道を千曲川に沿うて上流に向ひ、上田、小諸を經て岩村田に至つて宿る。同廿六日には追分を經て中山道の沓掛泊、同廿七日淺間山に行き、同夜は再び岩村田に宿る。同廿八日岩村田の南郊、猿久保にて韓大年が病み、駕籠で岩村田へ引返しそれより八月三日の朝迄四夜三晝、同所に滞在することゝなつた。かくて同三日に至り、一ノカ谷と云ふところに宿泊してゐる。こゝで日を追うての雜費記入が終つてゐるので、一行はそより何處の方面へ向つたか判然しない。行程記入の末尾をみるに、草津の道として小田井、追分、沓掛、上州狩宿、羽根尾、草津など岩村田より草津に至る主なる地名と里程があり、また鼠宿より富士への行程として、上田、海野、小諸、岩村田等の北國街道の地名と里程及び野澤、臼田、高野、宮の下と記し、是等の記載の前に海尻、板橋、野邊山、平澤、長澤、念場原、若神子、葦崎、甲府など前後するが岩村田より甲府に至る佐久甲州街道の主なる地名と里程が記してある。次に石和、上黒駒、藤野木、河口など、甲府より新坂新道を河口湖に出る街道の地名と里程が記入してあり、最後に上州草津云々の記載がある。これを要するに、鼠宿若しくは岩村田を中心に、一は草津へ向ふ道、一は佐久甲州街道より新坂新道を経て富士山麓に至る行程が記してある。いはゞ旅行プランの如きもので、一行が是等の兩道を辿つてまづ草津へ行き次に富士山へ向つたものか、それとも前記兼葭堂編大雅堂年譜に見る荒船山に登り次に、韓天壽旅日記にあると云ふ上州路から江戸へ向ひ、それより

富士山に向つたものか、明かでない。是れを三岳紀行と題するも、富士山の紀行が除外してゐるのである。

次に本紀行の日々の雑費記入を見てゆくに、一行は身に白衣を纏ひ、笠に絲立を著し草鞋を穿つ道者姿にて、時にして木賃に宿り或は焼米を口にして、長途の道中をなしたのである。而して宿場々々で銭買の記入があり、當時内地を旅するに異國を旅する如く、金の換算が行はれてゐたのを知るも珍しい。米價は土地々々で多少の相異もあるが、略一升三十五六文で現時に比して約百分の一に相當してゐる。よつて本文記入の金高の文の單位を錢に換算すれば、當時の物價が今を規準に査定され得る。尙本誌五〇號所載森銑三氏大雅堂遺聞に引用の仙臺澹齋老人編書畫聞見録に「その人至て篤實にして酒も飲まず、君子肌の人なり」とあり、同じく岡野逢原編逢原記聞に「婚姻の盃も麥湯しかるべしとて、酒に代へたりとなん」などとある如く、大雅が酒を嗜まざるは稍々意外とするところであるが、この紀行中あめ、もち、まんちう、おこし、くわし等下戸の嗜好に投ずるもの、記入の多いのは、更に裏書することにもならうか。而してこの行は六月、七月と盛夏より残暑の頃なれば西瓜や喫茶をとること多く、また洗濯の出費もある。それが七月中旬立山より下山の途芦峠では拾三着を求め、山中に早くも秋冷を感じてゐる。この道中で水運あるところでは舟をやとひ、山中で一度馬に乗る外はすべて徒歩で通しその健脚ぶりがしのばれるが、既記の如く信州で韓大年が病氣になつた。芭蕉の奥の細道紀行に於ては同行の曾良が北

陸の路で病み、伊勢の長嶋へ先發したとあるが、この時は大年養病の爲か、岩村田に四夜三晝も滞在した。その間に池おどり見物入用とあつて、滞留の徒然に鄙の踊を見に行く大雅の面目躍如たるものがある。尙屏風見物とか、紙墨筆、晒蠟、掃墨などの出費あるは、いかにも畫人の旅らしく一層になつかしまれる。本紀行中、殊に山川描寫の諸圖の妙趣深い云ふまでもないが、途上の見聞記や日々の雑費記入によつて、大雅をはじめ芙蓉、大年の風貌のしのばるゝと共に、當時の道中の狀況など窺知されて、その感興の盡くるところを知らない。

終にこの紀行の全文を掲ぐるに當り、深甚なる厚意を以て調査の便を與へられた津田信吾氏並に種々の示教を賜つた高野辰之、三村清三郎の諸氏に對し謹んで感謝の意を表する。(昭和十二年十二月)

追記

上記の文中に、三村清三郎氏の「韓晉齋韓天壽」中、中井敬所翁の談として中川憲齋が天壽、芙蓉、大雅の三翁の三岳めぐりの旅日記を藏して居つた由と云ふ記事をとつて、右が本紀行と同本のものか、または異本か不明なる旨を記して置いたが、其後三村氏の指教により、憲齋は天壽の裔にてその所藏者たるゆかりがあり、且安西於菟が右の日記を閱讀し、近世名家書畫談に収録したと云ふことであれば、右は同本とみて差支なからうと思ふ。

三岳記行

〔表紙。立山、淺間と朱記
外に所藏印三顆を鈐す〕

十日

一富山出はなれ迄町之内一り

斗夫より十五六丁新庄村

入口橋有是より

一のりや小八殿

(繪)

圖中に「葦峰」と記し、また「雲、谷、土坡、常願寺川、立山、地藏、村」など留書あり

(繪)

圖中に「一、二、三、四、五、六、山、水、瀧、田」など留書あり

(繪)

圖中に「遠、後、前、水、田」など留書あり

うは堂よりくす橋へ一り近し

上り下り川ニ添行橋渡り

こかね坂。

千坊原千手觀音堂破有 三四尺ノ堂

草おひ坂難所三四丁

しげりたる山中也

材木坂石六角或ハ五角 (石の圖あり)

如此大成ハ長三四尺周廻二尺五寸

許三四丁之内如此石而已外石なし

上ニ至リタテ算。横算右ノ石

豎ニ成たる所又横ノ成たる所

ワカリ有其上四五丁上り

能野權現堂千壽堂位ノ大サ

葛橋よりは是迄一り近し

美女坂一丁程上りわしか巖

美女坂六七丁有ル上ニ

美女杉ノかふ有サイキ有リ若

左衛門母ブシヨカフロ此所へ召れ

上リブシヨ得上り不申杉ト成七度

橋ニかゝり可申セイクワンにて

七度橋ニ成カレシトナリ又

四五丁上り坂平ラ七八丁

シカリハリ但穴有龍宮迄通し

左衛門ノ母我子ノ登リしニ

登られぬと事なしとて

怒り小便し給ふナラク迄

通しゆ也ダンサイノミサカ

凡三十間斗有り又平三四丁

かふる杉 松たけノ如しニカイ斗
又平十丁斗行

ふな坂 二三丁甚急なり岩坂也
上ハ又平ラ四五丁

一里地藏 夫より平ラスヘリ道ナリ

此邊杉ふなとち等木有シケリ山

大こや杉有半り斗なる坂也

三四丁行て

七回り大杉多し四五丁上り

ふし拜ミ地藏カリヤス坂

シヤウメウカ瀧谷向テ見ゆる

(繪) 圖中に「瀧」と留書あり

ふし拜ミ過てかりやす

坂十四五丁桑谷權現小宮

有坂下り石道也

桑谷(サヤ)攝待 中食

直ニ上り水坂石原谷ナリ水有

三四丁又ナル坂平登り十

丁斗小野此邊五葉松杉

有又坂道あしく七八丁上り

不動堂今ハなし地藏小祠有

大雅の三岳紀行

廣野にて尾張西浦はましま六兵衛

七度參詣不叶此所ニ室堂ヲ

立

此邊より越中能登ノ川々村々見ゆる

南ニ飛彈(ト)藥師嶽見ゆる其西前

桑崎權現山見ゆる藥師岳ハ

七月七日ニ一日上ル尤飛彈(ト)より上

是よりクサリヘ一り北海見ゆる

相もとのほし長三十三間

兩のたもと四間ツ、中廿五間

註 愛本

(繪) 圖中に「丸木、角三通、六段カ
スカイム」と留書あり

橋は、二間たもとノは、四間

(繪) 圖中に「水」と留書あり

浦山 愛本迄一り近し

一り十七丁

愛本橋渡り七八丁行て

左ノ方華表側石地藏有

一五

是より三四丁目アケヒ山法福寺

加州公祈禱眞言寺也

杉山有靜成所二王門へ向左ニ

直ニ舟見之驛へ出ル道有

十丁斗舟見入口へ出ル也

舟見 宿あし、二りたらす行て

柳イ田是より小川ノ湯へ三里
越中第一之湯也功有由

二り
廿九丁

近し小川かちわたり也

泊り
二り

市振

宿入口關所有女漆臘囚人亂心禁
宿あし、問や關役人菊や忠衛門
三日滯留

となみ
一り廿九丁

一り廿九丁

青海
一り十七丁

一り十七丁

宿出はなれ半り斗此間寺
となみ村此間ニ右ニ黒姫山
布川小川也かちわたり右ニ蓮
華山見ゆる越後越中飛驒
信濃へかゝりたる山也姫川
今ハ水すくなし かちわたり
入口へ切込流ル此川上左ニ
駒ヶ嶽見ゆる上ニ石駒有

石馬ハ
岩にて
天生

信州松本へ行道より見ゆる
前ニ御前山有明照上人之住
給ふ所也御前山ニ觀音有信

註 外波
註 寺地

也近ク
見レハ
不分明

州へ行程糸魚川より三十六里有
廻り行て右ニ駒ヲ見る白池村より見ル
白池ト云シロキ池有由此道中
六里斗難所也其先ハ村々續
併牛馬往來する也まきれ
道なし

ヲ、ミより
一り十七丁

是より善光寺へ廿八里有
宿入口ニ姫川ノ切所有今ハ此所舟
渡し川幅百三十間斗有

糸魚川

イチ
フリより

高田迄
頸引郡

寛延丁卯年此所へ切込干
四五百石つふれ舟渡直段不極
此度川明口にて凡三四十文ツ、我々
道者故十五文にて渡ル
少し行てすな道惡敷又
高々登ル道吉川有かちわたり
鍛冶屋敷川入口ニ有步渡

鍛冶屋敷
二り

宿あし、道すな道能道
交有海ばた通ル川有荒川
早川橋有右之方山水吉
道も海ばた砂道等通

能生
三

權現御祭禮三月廿四日人馬往來
イルカニ乗て御入來之由
折々百川トウサキノ人拜ム事有
イルカ幾万ト云數ヲ不知御還ノ時ハ
白雲海上へ三り斗立人馬往來白
山トカケモチニ被成ヒ神之由百川ノ人
拜ム事有

三
半

權現過て海ばた波打際道
吉砂道也ぬれたる所踏込ニス
とうさき休一軒茶や有是迄
一り半有又磯つたひ半り斗

註 梶屋敷
註 頸城郡
註 藤崎

なたち

手前にて山へ少登ル下りて五六
丁なたち也入口橋有宿百四
五十軒二三丁行て下なたち
辛未年山くつれて家ハ上
なたちより二十軒斗建て住
其所ノ者六百餘人墜死
外へ他行之者三四人殘ル
かへり住くつれたる山五丁斗

註 名立

高田

二三里東ノ方大^{ヲ、フケ}ふけ郷ニ土ヲ燒事
薪ノ如ク町一里斗出放右ニ妙光山^{マ、ク}
見ゆる其後ニ黒姫山見ゆる道々

茶や有

荒井 山道石高し坂ハ少し宿吉

(繪)

圖中に「越後妙高山」とあり、尙
「谷、大平、大ナタレ」など留書あり

(繪)

圖中に「野尻湖、遠、前、一、二、三、杉
松、島、町」などと留書す

一^リ十七^丁
松崎^{マツノサキ}
坂ハ少し

一^リ十六^丁
關山

宿中位出放坂有谷へおり
小田切谷橋有谷へ二^丁斗おり
又橋渡り二^丁斗登り上ハ平石道
すへり山道也白田切少しノ谷へ
おる也

大雅の三岳紀行

二^リ
大田切

宿あし、出放坂なり谷橋有
前ノ如し上ハ平道石道すへり

一^リ
關川

宿中そば名物宿はつれ高田御
關所女改男ハ不構關出直ニ谷也
二三^丁おり橋有十七八間越後信州
さかい也

一^リ
野尻

宿吉關川よりノ道も吉雨天ハす
へり出放水海有一^リ四方も有
景吉

一^リ
柏原

宿中道吉雨天ハすへり是より
とかくしいつなへ行宿中より右へ分ル
此所よりトカクシへ案内料百五十文
此所よりトカクシカケテ善光寺へ泊ニ
成様ニも行也イツナカケレハトカクシ
トマリ也トカクシへ五里近し又三十
丁登りわかれ道越後道ノ碑有

註 戸隠、飯繩

五^里
戸隠

奥院より入口二玉門へ八^丁又口ノ鳥
井へ八^丁二玉門内左ニ坊十三軒
大方空坊也鳥井より越後道へ
八九^丁少坂有夫より中院へ三四
五^丁夫より右へ方光院十二^丁則
下院也

善光寺へ下ル道中院寶光院
下院一ツ屋茶店アリ大久保
飯繩山左ニ見ルいつな原ト云
山坂有鳥居アリ夫より坂段々
めぐり右之方ニ桂山といふ山
城跡見ユル松本城目下ニ見ユル
又坂ヲ廻リ、善光寺本堂
後へ出ル

(繪)

圖中に「法華堂、戸隠山、女人道
戸隠山別當觀修、比丘尼石堂」など記す

(繪)

圖中に「鼠宿、此山ノ此所風穴有、岩原ノカサ
アサト云、烟出シ、此所ニケムリ出しナシ、鼠
宿より出十町斗大岩有凡五六丁ツ、算木ヲツミ
タル山也」などと記してあり

(繪)

圖中に、「古今なかき、しなのなるあさまの山の
あさましふ人の心を見るこそやまめ、
例年七月廿七日晝上諏方(マ)下諏(マ)の社司、
御射山に出て神事あり、谷、芝山、原、
クツカケ」など記し、また線外に、「天上ノ下也
此内、信州甲府街道鎌懸のさき右のかた
松原村松原明神、諏方の舊地のよし
淺間ナタレ、遠近の兩宮南地ノ神社と
申傳ふ、岩村田より乾ニ當十二町長月呂(オカト) 註 長土呂
村ニ有、正一位近津大明神諏方神祭
同ナタレ、信州狩宿村遠近宿有、追分の東 註 借宿
諏方神祭る、淺間サイノ河原ノ邊」などと記す

岩村田大黒屋問やノ向藥や

草津への道 清右衛門殿

小たい

金井ノ原少宿ノ手前一り塚
有左へ半丁斗芝ニ□有

註 小田井

追分

くつかげ

四り余原也

上州かりやど新田

關所有

註 香掛

註 狩宿

ニリ半
はにふ

アカツマ郡
吾妻

註 羽根尾

三リ半
草津

(繪)

圖中に「武藏野原、ト子川筋、ツクバ山、小アサマ、
淺間より見る圖、日光山、中禪寺ノ方、吾妻郡沼
田迄十七里續」など記してあり

(繪)

圖中に「淺間岳圖、追分の驛面」と記し、また
「此内十方八千佛、小煙タツ、カケ、大カケ、砂、芝、谷
松原、遠山、飛驒越中ノ方、立山ノ方」など留書す

(繪)

圖中に「ふじ、郡内山、妙義、ハナレ山
武藏野原」などと留書あり

(繪)

圖中に「立山圖」と記しました「本社、大汝、富士ノヲリ立」
など留書す

(繪)

圖中に「淺間より見る圖、川、ツクバ山、山、原
クツカケ、離山、カルイサハ、アサマ、フジ」など留書す

(繪)

圖中に「阿訶流山圖、向山邊ノ南、香坂、岩村田
右、左」などの留書あり。 註 關伽流山

(繪)

圖中に「香坂、鼻、川、右、道、新田、追分宿
芝」などと留書す

(繪) 圖中に「マナコカタケ、別山、劔峯」と留書す

(繪) 圖中の記なし

(繪) 圖中に「ハナタ峠、小浅間」と留書せり

(繪) 圖中に「妙義、クツカケ」と留書あり

間宿

かき(カ) 松原明神四五丁
山ノ内湖有廻り

ミヤノ 三ノ里
スワノ古地也

三ノ里
うみざり

二ノ里
海(ウミ)ノ口

二ノ里
板橋 原也延ヘヤマト云
是よりはらへかゝる

一ノ里
や(ヤ)で 新田
家二三軒あり

坂
一ノ里
ながさわ 一ノ里半
ねんば原也

前
平澤 信州甲州境

長澤より二ノ里
わかみこ 二ノ里
中(ナカ)庄(ショウ)

大雅の三岳紀行

註 若神子

註 長澤は平澤の次
念場原

註 野邊山

二ノ里

にらぶね

三ノ里

甲府

信州植科郡鼠宿より

富士山へ道路行程

うへ田へ二里

海(ウミ)野(ノ)へ二里

こむろへ三里

から松といふ松ハラを

とをり甲州、石

あり

廿五日

いわむらたへ 比田井文庵泊
此間ほそ道

一ノ里半

野澤へ 一ノ里半(ノ)門ほそ道

一ノ里

うすたへ

一ノ里

たかの町へ 畠村

間宿

宮のした

伊澤へより右へ出ほそ道あり
二ノ里四丁

上黒駒
とうのきへ 一ノ里二十九丁

御關所あり

註 菲崎

註 上田

註 小諸

註 岩村田

註 白田

註 高野町

註 石和

註 藤野木

一九

川口 二リ廿丁

御師へ着

佐藤勘解由殿 鼠宿

赤池長右衛門殿より

馳走有之

造作料百五十文斗

劍刀百五十文

湖 一里ありといふ

松原

中宮 三十五文入錢

かまのいわや きちん廿四文

上州草津湯本安兵衛方にて

靈巖寺宮御内

柴傳左衛門

六月廿七日

一三百文

一百文

一七十六文

一七十六文

一

一

韓 青木かり持出

同 はらあて

ふやうかし

笄代 池かし

同斷 たひ一足之ハ

池かり

れい一 高かり

〔註 是より以下旨々の 雜費記入〕

入壹貫廿文

一貳百七十八文

廿八日

一五十三文

一五十三文

一八十四文

一四文

一九文

大津

追分 買

大津追分

大文字屋久治泊

高 こほり 壹

池 同 壹

糸立三枚

水なわ

韓 さし

廿九日

一六十文

一三百文

一三百文

一二十文

一二十文

入壹貫十六文

一七十二文

一廿四文

一百八十四文

一百八十四文

朔日

馬原泊

舟ちん

昨日分舟 とう代料

今津より 川すそ迄舟ちん

韓より 人 かし

高 かいつ買

かいつ晝飯 并焼飯二ツ、持

山 中 中 食 茶 代

敦賀片はたこ 越後や次左衛門

カウツ迄夜舟 三人六十文ツ、

註 海洋

註 河野津カ

一廿四文

湯や茶代

七月朔日

一百文

府中中食

註 武生

一百九文

あそうづ
内田や嘉左衛門泊

註 麻生津

一廿文

米六合代

一十四文

米一升二合代
朝分へんとう

一百文

七月二日

一三十二文

小遣茶代

一十九文

一六十文

池 水入代

一十文

一十八文

こさ三枚
□るつと

入九百五十文

一三十銅

池 引もの

一三百六十六文

一五十文

中島ハツケ
茶や中食
汁香物代

一百四十六文

一五十文

水ハ中位にてひラタ
渡し也小舟ノ時
壹人二匁ツとも
申一匁位ニまけ甚ゆすり也
福井ノ者ハ五文ツも也此渡勝山
支配

註 小舟渡

一三十五文

一廿四文

四日

一十二文

四日

入壹貫十七文

わらんす
今朝福井にて
買

一六十文

一百廿五文

一廿文

一三十六文

一百廿六文

六日市
藤左衛門頼泊
尤辨當持此方より禮ニ遣也
内ノ男長左衛門
牛首迄三人荷持案内

五日

○類二匁五分ノ所
白衣道者故如此之由
被申

男長左衛門へ
荷も少々重故
祝義ニ遣

牛首七郎右衛門
中食壹匁世話
料三十八文
米一升二合代

しなのかき
五合

高かし

ゑんき 二

平泉寺出見セ
丁百也

山錢三人

米三升五合

三十文ツ、木錢
三十文茶代

わらんす 五

たい松三本

別山參錢

御前寶錢

室堂米代

同所みそ代

室堂御札

入九百十二文

おうそ 孫左衛門

註 尾添

一二百五十二文

同所 泊

一六六十六文

牛首よりやとひ
ちん六十八
ます

一三十六文

十二銅三

一卅 文

さんせん

六日

一百五十文

山せん
ヲ、ツ

入銀九匁五分五厘
三百八十九文

ヲ、ツ買

一十五文

下ノ木滑休

(繪)

圖中に記なし

六日

一廿 文

茶代

一廿 文

わらんす

七日

一百八十文

木ちん米代
内六十文茶代

つるき秋田や角之泊

一八 文

茶代
白うり

一四十文

あめ
茶代

入九百五十文

池 金澤買

註 鶴木

一三十三文

すいくわ

一百三十文

あらいもの

一百十五文

たばこ

一十二文

紙代

一銀壹匁七分
セに十九文

茶代

一三百文

はたこ

一三十文

梅ほし

八日

一四十四文

紙墨筆

一十二文

茶代

一八十五文

中食

一廿七文

茶代

一百 文

ハニフ八幡
寶物拜見

一三十三文

米一升二合

一百二十文

はたこ

今石動アザミ谷や□之泊

入九百六十文

石動買
アザミ谷屋
門

九日

一四十八文

高岡中食
わらんす二足

一十八文

茶代

一十 文

あんよう坊
もち

註 埴生

一九十文

一六十五文

一十文

一廿文

一貳百四十文

十日

一百文

延命院

一四十八文

一廿文

一三十貳文

一十日夜足峠權教坊留又

歸り可泊故拂未相濟

十一日

一三十文

一廿四文

十二日

一室堂大風雨滯留遣なし

十三日

入九百七十文

室堂

ゆする木より
高岡迄四里
川舟ちん

かつは

筆

西瓜

富山ひものや
長左衛門泊

岩峠中食

焼もらい米代
そう代料

繪圖

血盆經

わらんす
茶代

うは堂
御膳料

道々小宮
さいせん

桑谷せつたい
こんふ汁四膳

註 石動

入貳百五十四文

一壹貫二百十二文

入貳百三十文

一百文

一三百文

十四日

一金壹歩

一百五十文

一三十六文

一三十六文

一五十四文

一百文

一廿文

六十二文替

山錢別山廻り等

同所
銀四匁一分代

立山室堂
入用

銀三匁六分
代室堂にて

室堂世話ニ
相成ひ故初穂

山之參錢

足峠權教坊
造作料

御初穂三人分

池 血盆經

池 かし

韓 かし

高池 御札料

岩松へ
中宮へ
葛橋へ向ニ來
男へ

山へ米持來る男
へ禮ニ遣十三日

權教坊にて

同所にて

權教坊にて
あわせ三重
ちん禮ニ遣

辨當米代

一百十文

中江より上市
迄馬酒手共

一五十文

上市はたこ
晝中食

一廿文

茶代

一十二文

紙一帖

一五文

あめ

十五日

一十一文

わらんす

入九百七十八文

魚津買

一貳百六十七文

銀四匁二分代

高かし

一三十九文

韓手ぬくひ
かし

一三十八文

池水入
かし

一廿五文

紙色々

一十五文

西瓜

一三百文

竹田や 魚津はたこ
武之助 中食共

一十八文

米八合代

十六日

一十三文

茶代

一五文

あめ

一十五文

ねつけ
うちわ

一百五文

浦山村
炭や次郎五郎泊

一三十三文

下ニエ川郡
米一升五合代

註 下新川郡

一廿文

茶代

一十五文

わらんす三
あめ焼米

一五文

茶代

一十文

茶代ゆつけ

一五文

焼こめ

十九日

入九百九十文

市ふり

一七百文

菊や忠右衛門
市ふり三日
とうりう

七月廿日

木ちん三十五文晝
半木ちん米代五升
外二百文茶代廿五文也

一十五文

あめ

一十五文

青海休

一四十五文

姫川渡し

一五文

わらんす

一七文

わらんす二足

一二百文

石炭屋長右衛門
上々吉 糸魚川泊

廿一日

のふ

一廿七文

水くわ茶代

一十五文

茶代 二度

一六文

おこし

一六文

おこし

一十五文

わらんす

註 能生

註 市振

一十一文 おこし
 一廿八文 茶代辨當
 一十五文 汁等
 一百五文 高田入口
 一四十五文 まんちう
 一三十文 悪。高田
 能登や兵介泊
 米一升七合
 茶代
 廿二日
 一十文 おこし
 南ばん
 一十文 わらんす
 一五十三文 晝□汁
 一十八文 池 韓
 たはこ入
 一廿二文 水くわ
 茶代
 一十二文 關川休あわもち
 一貳百四十文 柏原久保悪
 三郎兵衛殿泊
 さは頼辨當持
 とかくし
 一十五十文 三社かけ案内
 右まし
 一廿文 池 高
 とかくし
 御影四枚
 一四十八文 同 同
 小札二枚
 一六文 同 同
 松
 一十二文 茶代 心に懸
 一十二文 酒 茶代

大雅の三岳紀行

註 戸隠

一十二文 一十二文
 一十文 一十文
 一二百七十八文 西瓜
 廿四日 善光寺と田や
 吉九郎泊吉
 御影
 一十八文 參錢
 一十文 きせる
 一十二文 一十二文
 一四十五文 一四十五文
 一五文 一五文
 一四文 一四文
 一六文 一六文
 一四十四文 砂糖
 一六十六文 小市
 サイ川舟渡
 二十二文ツ、
 小松寺茶錢
 こむきたんご三
 チクマ川舟渡
 廿二文ツ、
 矢代 茶代 註 千曲川
 註 屋代
 一廿四文 一廿四文
 一十一文 一十一文
 一廿四文 一廿四文
 一廿四文 一廿四文
 廿五日 坂本にこり
 一廿六文 上田六帖
 中折十枚
 一八文 かうやく

一二百文

赤池長右衛門
鼠宿泊

一廿文

梅ほし

入壹貫百文

鼠宿買

一七文

わけ物

一七十文

池
かけ

一十二文

紙

一十五文

もゝ

一十八文

中食
にこり

一六十四文

そは

一五十五文

高
かけ

一十二文

紙

一十七文

きせる

一四文

あめ

入壹貫百文

セに五百文

岩村田買

一二百文

岩村田比田井
文菴泊菊や也

米四十二文一升八合三十二文泊
二十文梅ほし代

廿六日

入壹貫百文

池買錢
くつかけにて

一三十二文

高
そは

一十文

高
茶代

一百文

池かし

一百六十文

くつかけ泊
米代壹升五合

一廿文

茶代

廿七日

一四十二文

わらんす茶

一五十貳文

淺間ノ下
花田とうけ
休にこりたんこ

一三十五文

同歸り又休
斷

一百十八文

山せん二人前
六十四文外ニ
五十文懸物代
茶屋へ遣

一十一文

わらんす茶代

一四十八文

そは二せん
飯一せん

一百八十四文

岩村田泊木
ちん米代

一五十文

酒代茶代

廿八日

一百文

猿糞
わつらい
せわ料

一四十文

池
火打二つ
かし

一四文

ほくち石

一六十文

黒さとう

一八文

たはこ

一百文

韓
わつらひ
か

廿九日

池
おとり見物
入用

一廿四文

池
おとり見物
入用

一廿四文

池
おとり見物
入用

一廿四文

池
おとり見物
入用

一廿四文

池
おとり見物
入用

註 猿久保

八月二日

一七十二文

一十八文

一八文

八月三日

入壹貫百廿文

一六十四文

一廿四文

一十五文

一金壹歩

一三百九十文

一廿五文

一五百文

一十五文

一廿文

一百七十文

わらひ

さとう

さらしろ

紙十枚

復はいすミ

せんたく物三人

屏風見物

ふどう明王

さいせん

つぼ醤油

いつみや 岩村田丈介

廿八日より三日朝迄四夜

三書泊世話料共

家内男女へ禮

母内義へ百文つゝ娘

兩人へ五十文男二人

廿文つゝ

わらんす

比田井文巻

藥九帖鉞三度

禮

まめ五合

茶代八文

岩村田男十二文

一ノカ谷安藤小八

泊米三十貳文

茶代二十文

裏表紙にあり

大雅の三岳紀行